

マラルメ、モスクワ攻防戦とゾルゲ、
右翼と公安警察

立花隆
ノンフィクション作家



×月×日

「本を読もう。／もっと本を読もう。／もっともっと本を読もう。」「本でないものはない。／世界というのは開かれた本で、／その本は見えない言葉で書かれている。」とうたう、長田弘『世界は一冊の本』（みすず書房 1800円＋税）を読んだ。「人生を考えて、どうなるものか。／何だろうとくそくらえ、それだけだ。／聞く耳をもたなかつた一人の耳に、／穏やかな口調で語られた言葉が、／三十年経って、ようやくとどく。／旧師の葬儀の日。」が妙に心に響くのは、自分も葬儀に近い年齢になっただけか。

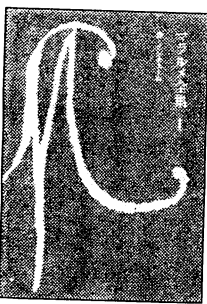
×月×日

『世界は一冊の本』といえは思い出すのはマラルメだ。「文学の進化に関するアンケート」に答えて、マラルメは「人間界は一つの美しい本に帰着するために造られたのです」と答えた——西脇順三郎訳『マラルメ詩集』（小沢書店）解説。マラルメは、一生かけてそのような一冊の美しい本を書き上げようとして、それを果たせずに終わった詩人ともいえる。マラルメが書こうとして果たせなかつた一冊の本の構想が「イジチュール」だ。それは「深夜」「賽の一振り」など四部から成る予定だった。八九年から刊行がはじまった『マラルメ全集』（筑摩書房）が途中で刊行が止まり、どうしたことか

配していたら、最近ようやく最終配本の第一巻「詩・イジチュール」が九年ぶりに出て完結した。書店に行つて手にとつたが、これが立派な箱に入っていて、中を見ようにも破壊しないと中身を取り出せない構造。定価19000円は高すぎると思つたが出版社と訳者を信用して不見転で購入。家に帰つて中身を見たが、なかなかと思うところもある反面、不満も多い。第一にこれだけの定価をつけるならもっと造本に気をつかつてほしかった。箱は立派すぎるが中身はチャチ。訳にも不満がある。詩集の第一行目。「Rien」につけられた訳が「虚し（鈴木信太郎訳）」「何もない（西脇順三郎訳）」に対し、「何もの

でもない」では音韻的にゆるすぎる。「Rien」の短いピシリとくる響きのよさが完全に消えている。「海の微風」の最も有名な一句「肉体は悲し、ああ、われは全ての書を読みぬ（鈴木訳）」「肉体は悲しい、ああ、そして私はすべての書物を読んだ（西脇訳）」に対し、「ああ 肉体は悲しい、それに私は すべての書物を読んでしまった。」ではゆるい。原文の「Rien」の語順も無視している。

もともと詩のニュアンスは意味から半分、響きから半分なのだから、大事な詩は原文も入れるべきだ（西脇訳はそうしている）。マラルメが翻訳してマネが絵をつけたポーの「大鴉」は、マラルメが編集造本したことでも有名だが、全文英文の原詩と仏訳を対訳形式でのせた。響き無視でマラルメは怒るぞ。ただし、註釈は立派だし、月報が充実している。それにイジチュールの「賽の一振り」がはじめてオリジナルの割り付け形式（きわめて重要）で読めるのは嬉しい。「概念との結婚」が十六枚の紙片からなる草稿形式で読めるのもありがたい。買って損はない。



『マラルメ全集』

たちばなかし 1940年長崎県生まれ。『宇宙からの帰還』『サル学の現在』『滅びゆく国家』『ほくらの頭脳の鍛え方』（佐藤優氏との共著）ほか著書多数。

×月×日

アンドリュウ・ナゴルスキ『モスクワ攻防戦 20世紀を決した史上最大の戦闘』(作品社 2800円+税)

は、第二次大戦史の中でも日本人にいちばんなじみが薄い独ソ戦の天王山、モスクワ攻防戦の実相を、機密にされていた膨大な新資料をもとにはじめてえぐり出した本。ワシントン・ポストが最良の歴史書と激賞した。

第二次大戦というと、日本人は連合国(米英仏ソ中)vs枢軸国(日独伊)という図式をすぐに思い浮かべるが、はじめからその構図が成立していたわけではない。はじめは独ソ不可侵条約があったから、ソ連は中立的な立場。日本もアメリカも参戦していなかった。第二次大戦はあくまでヨーロッパの戦争としてはじまり、英仏vs独が中心軸だった。

すべてが変わるのは、一九四一年六月、ドイツが不可侵条約を破って、ソ連に侵入してから。ドイツは得意の機甲部隊による電撃戦

術でみるみるソ連軍をけちらし、最初の一月で七百里も進軍した。三カ月か

四カ月でモスクワを落としてみせるとヒットラーは豪語した。冬將軍の到来前にソ連を征服し、ナポレオンの二の舞は踏まないはずだった(そのためドイツ兵は冬支度をしていなかった)。ソ連の資源(なにかんづく穀倉地帯ウクライナと石油)を入手できれば、ドイツはそこを生存圏として自給自足・絶対不敗の体制を築くことができるはずだった。

開戦当初赤軍はアツという間に崩壊状態になり、捕虜になる者が続出した。スターリンの過酷な統治に嫌気がさしていた者が少なくなく、ドイツ軍を解放軍と目したロシア人がかなりいたからだ。

スターリンは全部隊に「一步も引くな」という命

令を出し、その命令に従わない者は反逆者とみなし、その場で射殺せよと命令した。戦闘中の軍隊の背後に機関銃を持った「退却阻止部隊」を置き、退却せんとする兵を片端から殺した。

二百日間にわたったこのモスクワ攻防戦には、独ソ合わせて七百万人が参加し、ソ連軍戦死者百九万人、ドイツ軍戦死者六十万人もものぼった。第二次大戦中最も凄惨な戦いだった。モスクワは陥落寸前で追いつめられ、市民がほとんど逃げ出し、一時は四百万人いた人口がほとんど半分になった。

主だった政府機関も企業もぜんぶモスクワを脱出し、九百キロも離れたクイブィシェフまで疎開した。敗北必至のこの状況をひっくり返したのは、十月十六日に初雪が降り、間もなく吹雪になった冬將軍の訪れだった。

零下十度、二十度、三十九度と急速に落ちていく冷気の中で、冬服がないドイツ兵はアツという間に戦闘力を失った。戦車装甲車トラ

ックなど機甲師団自慢の車輛は動きがとれなくなつた。飛行機も飛べず、機関銃も凍りついた。

そこに、対日戦争にそなえて満州国境地帯にはりつけになっていた完全冬装備の極東軍がシベリア鉄道で次から次へ十万人単位で運ばれてきて、一挙に戦局を逆転した。

この大逆転をもたらしたのは、日本にいたスパイ・ゾルゲの情報だった。ドイツ人だったゾルゲは、駐日ドイツ大使館と日本の政治中枢に深く喰い込み、日ソ戦争の可能性を探っていた。ドイツは日本にソ連と開戦し、ソ連を東から攻めてはさみ打ちにするよう強く求めた。しかし日本は、むしろ南方に進出して、蘭印の石油を取りにいく作戦を優先させる方針を最高レベルで決定した。この情報を、ゾルゲは近衛首相の側近から得て至急報告で伝えてきた。

このモスクワ戦をきっかけに、英米のソ連支援がはじまり、日独伊と英米ソが対決する第二次大戦の図式

『ぼくの血となり肉となった五〇〇冊』(小社刊)には、この連載の五十回分も収録されています

×月×日

鈴木邦男(一水会顧問) ×北芝健(元警視庁公安刑事) 『右翼の掟 公安警察の真実』(日本文芸社 1400円+税)

は、ビックリするような取り合わせの二人が、驚くべき事実を次々に明らかにしていく。右翼と公安警察という、世間の目から一番隠された部分だが、これほどあからさまにされた本は前代未聞。組織へのスパイの入れ方から、尾行、張り込み、盗聴のテクなど、エツと思う話が次山出てくる。中でも秘密にすべき部分は伏せ字にされている。

「北芝」時効だから話すんですが、●●●●●(財団法人日本●●振興会会長、右翼運動家で政財界の黒幕的存在)が盗聴されていたことがあって、(略)聞いたくない話題がたくさんありましたよ。歌手の●●●●●は、味が良かった。締まっていたなんて、平気で話しているんですから」

こんな話がゾロゾロ。

『私の読書日記』は、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子、鹿島茂の五氏が毎週交代で執筆いたします。



『モスクワ攻防戦』